

われわれにウィリアム・クラークは必要か？ 1989年以降のポーランド高等教育システムの変化

ダリウシュ・コウォジェイチク（ワルシャワ大学、ポーランド科学
アカデミー／センター 2009年度特任教授として滞在）

札幌へやってきた私は、いたるところに建てられたウィリアム・クラーク博士を記念するモニュメントにショックを受けた。クラーク博士といえば、札幌農学校、後の北海道大学の創設者のひとりである。大学キャンパスばかりでなく街中いたるところで出くわすおびただしい数の彼のモニュメントを見て、私はトルコ、そしてとくにその大学キャンパスのアタテュルク像を思い出した。だが、ここには大きな違いがある。アタテュルクは外国人ではなかった。政治



エッセイ執筆中の著者

的なものであれ何であれ指導者崇拜というものが私は大嫌いなので、彼が自分のほんの数カ月の札幌滞在の間に日本の教育課程の発展になしたとされる貢献なるものの真偽性に対してすぐさま疑いの目を向けるようになった。「少年よ、大志を抱け！」というそこらじゅうに掲げられた彼のモットーを見るにつけ、「クラークを札幌に実際に招聘した明治期の指導者たちも含めて、日本人たちは彼の到着まで大志を抱いたことがなかったってわけか？それでアメリカからやってきた男から、「大志」という新しい異国的な概念を学んだということか。それともこれは、アジアやアフリカの「原住民」は進んだ西洋人から学ぶことしかできないという典型的な植民地主義の信念にすぎないのかな？」と考えたものだ。

もちろん、外国のモデルや文化にさらされることはつねにきわめて刺激的なことだと私は深く確信している。自分たちの優越性を信じ切って他者から学ぼうとしない者はただ怠惰なだけだ。しかし、外国モデルの自覚的な借用と、その成り立ちや潜在的影響力を実際に理解しないままでの無批判な猿真似の間には、非常に大きな隔たりがある。19世紀後半から20



知床クルーズにて

産諸国と比較して、ポーランドの知識人は比較的自立していた。1947-1956年のスターリン主義の10年の後はとりわけそうだ。党员でなくとも、マルクス主義イデオロギーにごちゃごちゃと頭を悩ませられずとも、限られたトップの地位を目指すのでなければ、技師にも、医者にも、職業的な陸軍将校にもなれた。それに比べて人文科学はあまり恵まれていなかったが、政治学者になろうと考えたりしなければ（おそらくこの理由で、政治学はポーランドの人文科学研究者たちの間で今日でもしばしば蔑まれる）、あるいは20世紀の政治史のきわめて微妙なトピックを専門的に研究しようというのでなければ、研究に関してかなり自由でいられ、中世の戦の結果を説明するのにマルクスを引っ張り出してきたり、日本における階級闘争の表現として生け花を観賞する必要はなかった。

1956年以降、ポーランドは共産化した欧州諸国の中でおそらく最もリベラルな国家だった。もちろん、この「リベラリズム」はけっして理想化されてはならない。他人の出世への悪意に満ちた干渉や、「匿名の個人」による攻撃、政治的な殺人事件さえ起った。これは限定的な範囲での出来事だったが、熱心な反対派の比較的限られた集団には影響を及ぼしていた。（多くの党员を含む）大多数の市民が日曜日にカトリックのミサに参加し、歴史の教科書には絶対に載っていなかったにもかかわらず、カティンでのポーランド人将校の大量虐殺の責任が誰にあるのかをちゃんとよく知っていた一方で、沈黙による同意がはびこっており、それによって共産党は支配していた。ポーランドの学界人の圧倒的多数が、第二次大戦期の国内軍（Armia Krajowa）での活動や1944年のワルシャワ蜂起への参加を隠さなかった。これは軍事的にはナチスに対する蜂起であったが、政治的には戦後のポーランドをソ連が支配するという未来への反対であった。ここでは3人の歴史家の名前を挙げるにとどめておく。なんと私立大学であったルブリン・カトリック大学の総長イエジー・クウォチョウスキ、そしてウィトルド・クラ、アレクサンデル・ゲイシュトルである。後者2人はワルシャワ蜂起の敗北の後、ナチスによってリューベック近郊の戦争捕虜収容所に入れられ、そこでフランス人将校で同僚の歴史家という人物に出会った。フェルナン・ブローデルである。この時の友情がフランスの多くのフェローシップに結実し、西側への旅行が再び可能になった1956年以降、ポーランドの若手人文研究者に提供されることになる。

1980年にはたくさんの教授や学生が「連帯」に加わった。1981年に出された戒厳令のおかげで共産主義はもう10年生き延びることになったけれども、私は自分が1981年から86年ま

世紀の日本の目覚ましい台頭は、外国からの輸入によるものか、それとも自らが持っていた強さと伝統によるものかという問いはすでに十分に議論されている—もちろん史学史において明確に解決されたというわけではないし、この問題に関して私は専門家でもない。

しかしこのようなコンテキストで、ポーランドの学界がこの20年の間に経験した変化についての私の考えをいくつか皆さんに披露したいと思う。他の東欧の共

で学び 1988 年に仕事を始めることになった大学が、開かれた議論のためのすばらしい場所となったことを覚えている。1980 年代の半ば、入試の筆記試験の最中に、19 歳の女子受験生が 300 人くらいの受験生を前にして、私が答えるように期待されているのは、「真実」なのか、それとも「教科書に書かれていること」なのか、と試験委員会の委員長に尋ねた。会場はそれを面白がりこそすれ、憤慨したりなど決してしなかった。1983 年、大学院生としてブロッツワフ（ドイツ語ではブレスラウ）への研究旅行へ出掛けの際、教授からわれわれが耳にしたのは、当時のプロパガンダではなくて、14 世紀から 1945 年までの都市の発展の大半はドイツの文化と制度に結びついていること、そして都市の歴史を理解するためにわれわれが学ぶべきは、まさにそれらドイツの文物であるということだった。また、（ポーランドの共産主義崩壊の一年前の）1988 年に助手として入学試験にかかわった折、ある受験生のフォルダに同封されていた、地方の党委員会からの推薦書に私は意地悪く難癖をつけたことがある。すると委員会の議長をしていた先輩の教授が、そんな文書を引用した私をすぐさま咎め、われわれは偏見を持たず、受験生の知識を評価するべきだと言った。自分の CV にこの文書を同封しようと思った受験生本人にはそうでなかったようだが、その場にいた全員に、党の推薦書はそれほど役に立たない、それどころかそんなものは受験生の印象を貶めることだってあるのだということが明らかだった！

私がこういったアネクドットを引っ張り出してきたのも、共産主義ポーランドの大学は共産主義イデオロギーに完全に支配されていたのでは決してないこと、外国との接触や外国からの影響力から完全に引き離されていたのでは決してないということを証明したいからだ。共産主義権力だって学術の不可侵性や自由をいくらか認めたのだ。クラコフ大学が 1364 年の創設であり、中欧・東欧の最古の大学の一つだという事実は、公的なプロパガンダにとっても、ポーランドの学界メンバーにとっても誇りであった。

そういうわけで、1990 年代のすばらしい幕開けが、ポーランドの OECD (1996 年)、NATO (1999 年)、EU (2004 年) への加入で締めくくられたことはそれほど驚くべきことではない。多くの変化はかねてから期待されていたもので、また実際に歓迎された。喜ばしいことに、今日、EU のエラスムス交換プログラムのおかげで私の大学院生たちは、ドイツ、フランス、イギリスそのほかの多くの国（その中には新たに EU に加盟してこのプログラムの恩恵を受けているリトアニア、チェコ、ハンガリーあるいはルーマニアといった近隣諸国も含まれる）の最高の大学で 1～2 セメスターを無償で学ぶことができる。アメリカの大学にポーランドの若手研究者が頻繁に行っていることから、「学生によるフィードバック」という新機軸が輸入された。これは現在ではポーランドのすべての大学でみられるが、実は私の母校では 1990 年代から存在した。ヨーロッパの教授の伝統的な講義が中身はあるが退屈なのに対して、ときに笑いで講義を中断させるアメリカのやり方は大いに模倣するに値したし、学生もこれを大歓迎した。私が前の講義で優れていると紹介した外国の書籍を、学生たちが「アマゾン」で買いましたよと時に報告してくれるのも清々しい。西側の一冊の書籍の値段がポーランドの一ヵ月分の給料と同じくらいだった 20 年前には想像もできなかったことだ。たいして異議も出ないだろうと私は学生たちに英文講読を割り当てる。しかし、ポーランドで英語の流暢さが驚くべき進化を遂げたのは、ロシア語、フランス語、ドイツ語といった伝統的に教えられてきたそのほかの外国語が、それぞれ衰退したことの結果だということをわれわれは嘆かねばならない。

若いポーランド人が今日、留学に、仕事に、余暇にと気軽にヨーロッパへと旅するのを見ていると、すくなくとも EU 圏内では実際にもまた人々の意識の中でもボーダーが消滅しつつあるという感じを強く受ける。

だがもうひとつ、私が触れておきたいそれほど楽観的でない側面というものもある。1989 年

以降、われわれが「西側基準」を取り入れるべきだという考えは、ありふれたリップ・サービスになってしまい、よもや西欧民主主義理念を抱くとは思われなかった人物からもそんな言葉は飛び出してくる。西側生活が極めて限られた経験でしかない教育大臣が、われわれの高等教育の水準をアメリカのそれに見合うものにすべきだと宣言しているのをおかしく耳にしたことがある。悲しいかな、われわれがアイヴィー・リーグの大学を目指すべきなのか（そして教育省はそういった大学を財政的に支援するのか）、それとも、ポーランドの高校生の平均レベルにも達しないような、アラバマの郊外の短大を目指すべきなのか、大臣は触れなかった。

ポーランドの大学カリキュラムに影響を及ぼす客観的な要因として、学生数の著しい増加が挙げられる。共産主義化のポーランドでは、各世代の約7%が大学を卒業したに過ぎなかったのに、今ではその数は40%に達しようとしている。このような変化は社会全体で見たとき、確かに有益なものではあるが、関係者には悪影響を及ぼしうる。かつては雇用を保障した大学の卒業証書も、今ではそれを約束するものではない。学位論文の審査をパスした博士課程の学生は、遅かれ早かれ大学のポストを得られるであろうことをかつてなら疑わずにいられた。学部学生同様、大学院の学生も増えるにつれて、現在までポーランドの大学卒業生が事実上知ることのなかった、雇用のない状態に彼らは間もなく直面することになるだろう。西ヨーロッパ諸国でしばしば噴出してきたところの、経済的・政治的理由による学生の暴動が、いつの日かポーランドでも起こるかもしれない。

ポーランドにおいて、国立・私立双方の大学が雨後の筍のごとく増殖したことは、教育水準に関してもまたときに逆効果を及ぼしている。トルコではすでに、そのように拙速に設けられた大学に「スラム大学」（トルコ語では *gece kondu*、逐語的には「一夜で建てられた」）なる皮肉なレッテルが貼られている。アカデミックな位置づけが不安定なこれらの大学の総長や教授たちは、外部からの干渉に対しての自治を守ろうとする、より伝統ある教育研究組織の同僚たちと比べると、国の権威により追従的な傾向が見られる。大臣たちが、こういった新しくまだ弱い組織をしばしば好むということが、トルコやポーランドだけでなく、ドイツその他の西欧諸国でも見られるということは全く不思議でない。大半の西ヨーロッパ諸国が長きにわたって社会民主主義者の統治下にあるという事実と相俟って、1968年の反エリート主義的なスローガンは、エリート学府にとって好ましくならぬ雰囲気を作り出すのに一役買った。フランスでは、エリート的な教育研究組織は「グランゼコール *grandes écoles*」の名のもとにようやく生き残っている状態で、かつての名門ソルボンヌのようなところも含めて、一般的な大学は良くも悪くもない水準の大衆教育を提供している。ドイツでは、真の研究やスカラシップはマックス・プランク研究所にしばしば避難所を見出している有様で、大半の大学がポピュリストのスローガンの餌食となった。数年前、ワルシャワ大学は Network of Excellence 計画のメンバーに招かれた。これは、社会科学高等研究院やオックスフォード大学などヨーロッパの先進的な組織がイニシアチブをとって作ったものである。しかし、ブリュッセルの選考委員会は提案を退け、ネットワークの財政的な支援を拒否した。これはこの提案がより優れた別のものに負けたということではなく、審査員の一人が内々に明かしたところによれば、それが「あまりにエリート主義的」に思われたためだということだ。あまりにエリート主義的という口実で、Network of Excellence への財政支援を拒否することは、その当時の私にはシュールレアリスティックに思われた。しかし今ではそれを、EU内の教育政策に完全に従った、典型的な動きだと考えている。ヨーロッパ最高水準の学生や教授陣がアメリカにさらなるチャレンジを求め、それゆえに最も活動的な革新者や頭脳がヨーロッパから奪われてしまうことは間違いない。

いわゆる「ボローニャ・プロセス」という名の下で、ヨーロッパの高等教育システムを強

制的に統合しようとする動きを、私はこの文脈で見ている。3年間の自立的研究の結果としてのM.A.論文という栄冠に飾られた5年間のカリキュラムが、1年間のゼミの後に体裁だけ整えたB.A.論文を書くよう、また同様に薄っぺらいM.A.論文をその2年後に書くよう、われわれは学生に強くなければならなくなるのである。われわれの若い同僚、研究者仲間としてかつては扱われていた博士課程の学生たちは、彼らの地位を一般学生のそれにまで引き下げるものとして、「ポローニャ・システム」をすでに嘆いている。かつて博士課程の学生とその指導教官を結びつけていた共通の信頼関係に代わって、毎年の試験や頻繁な点検にさらされることになったのだ。共通のモジュール・システム(学部3年+修士2年)は国際交流をより容易にするだろうという議論は、単純に成り立つものではない。エラスムス交換プログラムはポローニャで宣言されたやり方をEUの大半の国が採用する以前でも、10年間立派に機能してきた。そのようなモジュール・システムが柔軟性を促進するだろうという議論もまた同様に非現実的である。数学の学士の学位を持っている学生が日本学の大学院のコースに、すなわち彼が数学を学んでいた3年間の間、すでに日本語を学んでいる学生たちに加わることが可能だというのだろうか？あるいはその逆も？

私の懐疑的な態度にもかかわらず、かつて同僚たちに主張したことを覚えている。いったんEUの加盟申請した以上は、既存の加盟国が合意に達したルールに対してわれわれは疑義を抱けない、なぜならそんなことをすれば我々は加盟できなくなるからだ、と。ポーランドが「クラブ」に加入して5年が過ぎた今日、「ポローニャ宣言」が一定水準の教育のためではなく、EUの政治家たちの大衆迎合的な計画に資するものであることを、私は以前にまして確信することとなった。これはわれわれが共産主義時代に慣れ親しんだところの「ウラヴニロフカ」(ロシア語からの借用語でポーランド語では「水平化・均等化」を意味する)の別の形に他ならない。最高学府を目指す先進的な教育研究組織にとって、均等化が有益であることはありえない。

今日のポーランドで雨後の筍のごとく増えている流行に乗った舶来モノとして、ジェンダー研究がある。私と同様、ポーランド人女性研究者の幾人かは、ドイツやアメリカから来た「フェミニズム宣教師学者」と遭遇した際、彼らが、ポーランド人女性は抑圧された「原住民」であり、彼女たちから「虚偽意識」を取り除かねばならないとみなしているという印象を受けるのである。アメリカや西欧の多くの学部よりも、共産主義ポーランドで女性教授を見つけることのほうがたやすかったといった類のいかなる議論も、まったく意味がない。まるで笑い話のようなこのような誤解も、ブリュッセルから学術プロジェクトへの資金を調達するためには、プロジェクトに要請される「女性参加率」のクォータを満たさなければならないということを知れば、それほどおかしなくなってくる。知的に劣っていて人工的な昇進が必要であるように扱われる女性研究者にとってきわめて屈辱的なことだが、このように政治的に打ち出された数値上の諸標準は、最高学知に達しようという高らかにうたわれた目的にはあまり貢献しないのである。通常このような施策を推進する左派あるいは極左の政治家たちは、ポーランドその他のヨーロッパの大学でユダヤ人の数を制限するために、1930年代に同



一歳半の息子さんの異文化体験

様の哲学が採用されたことをしばしば忘れてしまっている。社会における比率に比べて、ユダヤ人が大学に「超過代表」されていると考えられたため、ほかのエスニック集団を増やすために打ち出された「格差是正政策」は、実際のところユダヤ人の教授や医師、弁護士、そして学生を標的としていた。しかしユダヤ人の学生が豊かで教養ある家の出とは限らなかったのである。こういうことを知っている、今日大学レベルで行われているいかなる形の「格差是正政策」にも疑いの目を向けてしまう。これらは不公平に扱われたと感じる関係者の記憶に傷跡を残すし、ほとんど効果的でもない。もしこのような方策を機能させようと思うなら、もっと早い段階で、チャンスをより平等にするのにまだ遅くない学童前教育や小学校レベルの教育に適応されるべきだ。さもなければ、これらはかつてずっと早い段階でしかされた国家や社会の失敗を補填しようと考えている政治家たちの面子を立てる道具としてしか役に立たない。国が保障する育児支援のシステムも、数値上の割り当てよりはずっと効果的に、より多くの女性が大学に参加するのに効果的であるように思われる。

ポーランドの学界の歴史にとって、ここ20年はおそらく一番「ラッキーな」ものであっただろうとかつて私は考えた。共産主義によって押し付けられた官僚主義的な束縛から自由になったがドイツやデンマーク、あるいはスペインの研究者たちがそれぞれ官僚的な大臣に対して陥っている奴隷的な服従状態にはわれわれはまだ陥っていない。ましてや、これまであらゆる民主主義的な統制を逃れ、むしろ一般市民の生活の統制を目指してきた機関であるブリュッセルの欧州委員会の指示に盲目的に従うことには、われわれはよりいっそうの躊躇を感じるのである。やはり私は楽観的に構えたいし、ヨーロッパはその東部も含めて、その莫大な人的・経済的潜在力をより効果的に利用することができるし、それは高等教育システムを世界規模でより競争力の高いものにしていくことでも可能だと考えたいのである。

(英語より高橋沙奈美訳)